

地域情報（県別）

【栃木】大学病院との連携深め「家に帰りたい患者さんの希望かなえたい」-吉住直子・れもん在宅クリニック院長に聞く◆Vol.2

2023年7月14日（金）配信 m3.com地域版

大学病院から気軽に相談してもらうことで、幸せになる患者さんも増えるだろう——。臨床検査技師とヘルパーの経験を経て医師になった吉住直子氏はこんな思いで2022年12月、下野市の自治医科大学附属病院そばに開業した。吉住氏が病診連携を深めたい背景には、ある患者から言われた言葉もある。「私という患者がいたことを、よく覚えておきなさい」。吉住氏が在宅医になるため選択したキャリア、その中で出会った印象的な患者とは。（2023年6月6日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら



吉住直子氏（クリニック提供）

——吉住院長は2014年に群馬大学医学部を卒業後、臨床検査技師として過去に勤めた自治医科大学附属病院で初期研修を受け、後期研修では同大の呼吸器内科に進みます。

医療の先端を学びたいと思い、大学病院で研修を受けました。医学部編入が決まったところから「将来は在宅医に」と考えていましたが、患者さんやご家族にとって良い在宅医療を提供するためには、医療の限界を知っておくことが必要だと考えました。ICUの現場など救命を重視する医療を知らなければ、病院なら救える患者さんを今度は逆に家に縛ってしまう可能性が生まれるのではないかと。大学病院で先端医療を学ぶことで医師としての選択肢が広がり、「こんな方法もあるけれど、あなたの場合はやらない方が良いと思います」といった奥行きのある提案ができるのではないかと思います。

後期研修で呼吸器内科に進んだことも、在宅医療に生かすためです。この診療科では肺がんや肺炎、ぜんそくなど高齢者に多い病気を診られるほか、抗生物質やステロイド、在宅酸素や医療用麻薬の使い方も学ぶことができます。高齢者医療に役立てることが多い特徴に魅力を感じました。

——後期研修を終えた後、2019年からJCHOうつのみや病院に、2020年から在宅専門のさつきホームクリニックに勤務して2022年12月に開業します。勤務医時代に印象深かった患者はいますか。

自治医大の呼吸器内科で出会った70代のおじいちゃんは強く印象に残っています。その人は胸腔ドレナージを行うために肺に管（ドレーン）が入っていたのですが、家に帰りたい思いを強く持っていました。当時の私はまだ在宅医療を学んでいなかったため、「この状態では家には帰せないだろう」と思いました。同僚も同じ考えのようでした。

在宅医療を学ぶうちに分かったのですが、これは私の思い込みでした。肺に管が入っている患者さんでも在宅下で管理することは可能であり、在宅医としての今の私に依頼があればお引き受けすると思います。当時の大学周辺における在宅医療の状況が関わりますが、状態的にはお家に帰してあげられる人でした。しかし、当時の私は「帰りたい」と訴える患者さんに「（管が）抜けないと帰れないよ」と答え、結果、その人は病院で亡くなりました。

今でも鮮明に覚えているのは、おじいちゃんが生きていたときに言った言葉です。「医者として、人として、私のことをよく覚えておきなさい」。大学病院なので、その人の呼吸状態が悪くなったときに私たちはCTを撮ったり薬を調整したりしましたが、「自分がやってもらいたいのはそんなことじゃない」「こんなにも帰りたいと言っているのに」と彼は言いました。おじいちゃんは企業の経営者でありとてもしっかりした人だったので、おそらく教育として私に言ってくれたんだらうと思います。今でもその人の顔が浮かび、「帰してあげたかったな……」と悔やまれることがあります。

——先生が自治医大のそばに開業したのはそうした経験も関係しているのでしょうか。

そうですね。開業までに大学病院、地域の中核病院、在宅クリニックという異なるフィールドを経験して思うのですが、市中病院のほうが患者さんは在宅医療につながりやすく、また高度医療を提供する大学病院のほうがその可能性は低くなりやすいのではないのでしょうか。先述のおじいちゃんも大学病院の患者さんでした。大学病院はその特性から在宅医療に理解の深い医療従事者がまだ多くはない印象で、中には患者さんの状態的に「帰したら開業医の先生に悪い」という配慮もあったりするんですね。でも、在宅医としては紹介してくれることで患者さんやご家族が幸せになりやすいのでは、と思うケースが少なくありません。

私が過去に臨床検査技師として勤め、また研修医としてもお世話になった自治医大と連携を深めて地域医療に貢献したいと思い、開業場所を決めました。



自治医科大学附属病院そばにあるクリニックの外観（クリニック提供）

——開業して半年が経ちました。先生が希望していた大学病院との連携は進んでいるのでしょうか。

進んでいると思います。私の経歴なども影響して安心感を得られているのか、自治医大の先生からも気軽に相談してもらえることが増えています。私がお引き受けした患者さんの状態や状況から、「こんなケースでも帰せるんだ」と知っていただけたこともあるのではないのでしょうか。ケアマネジャーや訪問看護ステーションとの連携開始、介護申請の手続きなどを含めて包括的に当院が引き受けることで、「患者さんを帰しやすくなった」と医師に思ってもらえれば、患者さんやご家族の幸せにつながる機会も増えていくと思います。

当院は現在、常勤医が私1人、非常勤医が2人、看護師3人、事務5人の体制です。クリニックとは別に会社を設けてそちらで訪問看護ステーションを運営しており、スタッフは訪看の仕事にも携わっています。患者数は居宅が60人です。開業から半年というスパンを考えると、順調に患者さんは増えていると思います。

◆吉住 直子（よしずみ・なおこ）氏

臨床検査技師とヘルパーの経験を経て医師を志す。2014年群馬大学医学部卒。自治医科大学附属病院で初期・後期研修を受け、JCHOうつのみや病院、さつきホームクリニックを経て2022年12月にれもん在宅クリニックを開院。

【取材・文 = 医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

